

互いに助け、成長する、きざしとまなざし。

表現する人 長濱 哲哉さん



寄り添う人 長濱 志穂さん

仲の良い姉弟の志穂さんと哲哉さん。姉である志穂さんは、弟の哲哉さんの面倒を見ているつもりが、実は自分も弟から助けられているのだと言います。互いに助け成長する姉弟の姿がそこにありました。



長濱 志穂さんの まなざし

今でも時々、感情のコントロールがうまく出来ず大泣きしてしまう事があります。ただ、数時間経つと、てっちゃん(=哲哉さん)の心の中で「あーあーまた泣いちゃったー」と感じているようで、紙に「昨日はごめんなさい」などと絵を描いてサービスのスタッフさんに渡したりしています。それを見ると「なんだ、一人で反省会をしていたんだ」って思うんです。てっちゃんはずっと幼いままのイメージでしたが、自分がやったことをゆっくり自分なりに咀嚼しているんだと思います。なかなか外に言葉を出せないてっちゃんにとって、絵は大事なコミュニケーションツールなんだと感じました。

てっちゃんはしゃべるのが苦手な分、空気を讀んだり、人の表情をすごくよく見て、いろいろなことを敏感に感じ取っているんです。私が中学校に入学して、不安で部屋で泣いていたときにも、急に語り始めて笑わせてくれたことがありました。「しほちゃん大丈夫!! 僕がいるよ!」と言われていた感じがしてホッとしたことを覚えています。私が面倒を見ているだけでなく、私もてっちゃんから助けられていて、それが今の私の強みになっているんだと思います。もし目が悪かったら、メガネとかコンタクトとかをつけますよね。それと同じで、苦手なものを補うために、何をするとその人にとって生活しやすくなるかを考えてあげる。苦手なことが駄目なんじゃなくて、克服までいかななくても、どうやったら苦手なことをカバーしながら前に進めるのか。そういう考えは、みんなが生きていくためにとても大切なんだと思います。

長濱 哲哉 プロフィール

2005年山形市生まれ。山形県立村山特別支援学校高等部1年。4歳頃、自閉性の障がいを持つ就学前幼児を支援する「すずのこ教室」に通い始め、10歳頃からお絵かきボードで自分の気持ちが通じたことを機に絵を描き始める。中学頃からは絵に自身を登場させて願望を描くようになり、その後は作品の発表機会も増え、現在では絵を描くことが自分の気持ちを伝えるコミュニケーションツールの一つになっている。



もうひとつの まなざし

雨の中で「ザクザク、ザクザク」と言いながら落ち葉を踏み、公共電話ボックスに入るとは「もしもし」と言ってボックスを出て走りまわり、何時間もそれを繰り返す…。私たちは、当時のてっちゃん(=哲哉さん)が大好きだった外遊びにとことん付き合いました。志穂さんがすずのこ(教室)に来たばかりの頃は、てっちゃんの姿を追ってばかりでしたが、彼女にも世話役がつくことで、他の兄弟と一緒に遊んだりする機会も増え、すずのこにいる時はてっちゃんのことを気にせず楽しんで帰っていくようになりました。すずのこを修了してからはむしろ、私と志穂さんの関係は深まったように思います。一緒にテスト勉強をしたり、志穂さんの演劇を見に行ったこともありました。そんなときでも志穂さんはてっちゃんの話を楽しそうにしていたのがとても印象的です。また、てっちゃんの展示を見に行くのが楽しみで、絵を手袋として自己表現するてっちゃんはカッコよく見えました。てっちゃんを知り合いに紹介するときは、「絵を描く私の友達」と言っています。てっちゃんも志穂さんも今では私の大切な友達となりました。

(支援学校教員/鈴木 希菜さん)

※志穂さん、哲哉さん姉弟が幼い頃3年間通っていた「すずのこ教室」の元ボランティアスタッフ

違いを認め、尊重し、共に考え表現する。

表現する人

寄り添う人

大泉 真帆さん



長谷部 康寛さん

写真家の長谷部さんが、生まれつき全盲の真帆さんの絵画作品に感銘を受けたことから、二人の交流が始まりました。お互いに影響を受け合いながら、新しい創造を生み出す試みを行っています。



長谷部 康寛さんの まなざし

はじめて真帆さんに会ったとき、彼女は紙にペンを落とすようにして音を立てて描いていました。そのリズムは、たまに遅くなったり一定になったり変化するんです。それからザッと線を描いて、またトントントンと描くのをずっと繰り返していました。まるで真帆さんの中に流れている音やリズムが具現化されているように感じました。さらに知り合ってみると、自分とにも変わらない、音楽好きの一人の女性だと気づきました。

はじめての共同制作では、真帆さんと一緒にどんな表現ができるだろうと考えました。僕が真帆さんの気持ちを知らないと、目を閉じてシャッターを押してみたり、試行錯誤を繰り返しましたが、結局のところ、僕が彼女を疑似体験することはできないし、その必要もないという結論に行き着きました。そこで真帆さんの描き方に着目し、手の動きを定点撮影して、その動き全てを写真の中に写り込ませました。結果として、真帆さんと一緒にいた3分間が表現された作品になりました。

それぞれに生きている世界があり、その「当たり前」には新鮮な気づきがありました。相手を正確に「理解する」のは必ずしも必要ではなく、「考えてみる」「知ろうとする」ことで相手を尊重し受け入れることが重要なんだと思います。今は、「どうしように描いているんだろう?」と真帆さんの世界を想像することが、共同制作の楽しみの一つとなっています。

もうひとつの まなざし

真帆さんの作品に感動し、生まれつきの全盲の方が絵を描くってすごいな、どうしたことなのを知りたい、という長谷部さんに真帆さんを紹介したことから、二人の交流が始まりました。いつもは長谷部さんが真帆さんの側に座り、時間をかけてじっくり話をしています。長谷部さんは、好奇心から質問ばかりするのではなく、自分のこともオープンに話されていて、同じ表現者同士が対等に理解し合おうとしている様子でした。ピアノをひく真帆さんを羨望の眼差しで見ている姿や、真帆さんの反応に一喜一憂している姿から、長谷部さんは純粋に真帆さんのファンに見えてくるときがありました。表現を生み出すことが、二人の中心に置かれることで、いろいろな境界を飛び越えられると感じました。

(アートサポートセンター コーディネーター/武田 和恵)

※大泉 真帆 長谷部 康寛二人展「見えるものの向こう側」企画者(→P32)



大泉 真帆 プロフィール

1996年西村山郡河北町生まれ。山形盲学校を卒業後、寒河江市の福祉事業所「さくらんぼ共生園」で創作活動を行う。陶芸、織物などを体験し、2019年からペンをを使って絵を描き始める。生まれつき全盲のため、言葉や今までの経験から色をイメージして描いており、好きな色はピンクと黄色。ピアノやカラオケ、ジャンベなどの音の出るものに対しては特に関心が強い。グループ展、二人展など、意欲的に制作に取り組んでいる。



地域へ出かけ 一緒にやってみる [アウトリーチ事業]

ら・ら・らでは、2018年から県内各地域に出向き、福祉、行政、芸術分野などの方がたと連携した実践の仕組みづくりと人材の育成に取り組んでいます。こうしたアウトリーチ事業によって、活動が山形県全体へと拡がり、各地で育つことを目指しています。今年度からは、身体表現のワークショップを実施し、あらたな表現の可能性やネットワークが拡がりました。人材育成事業では、昨年度に引き続き展示会に合わせた研修会や相談会を各地域のみなさんと連携して企画し、実践を交えて取り組みました。各地それぞれの特色があり、あらたに表現活動中心の事業所もスタートするなど、活動が様ざまに展開しています。



「からだをまなざす・ダンスワークショップやまがた2021」

「さざしとまなざし」展示会の巡回地である鶴岡、山形、米沢の各団体と連携し、2021年度は同テーマによる身体表現のワークショップを、オンラインを交えて実施しました。このダンスワークショップは、表現の可能性を拓けることを目的とし、既存の振りに合わせるのではなく、それぞれの身体性や人と人との関係性を大切にしながら行いました。ファシリテータには振付家・ダンサーの砂連尾理さんをオンラインにて招き、山形県内の身体表現に関わる方がたにも現地ファシリテータとして関わっていただくなど、人材育成も目的としています。さらに各地域での取り組みは、映像作家の目線で映像に記録し、県内3地域の展示会場で上映して発表機会をつくりました。

「まなざす身体の可能性」

砂連尾 理 (振付家・ダンサー)

「からだをまなざす」ワークショップは山形県内の鶴岡市、山形市、米沢市の3カ所で開催しました。私は今回ファシリテータとして関わりましたが、コロナ禍ということもあり直接現地には赴かず、東京からオンラインでの参加となりました。ワークショップ参加者とは対面で直に会えないということもあり、私と参加者を繋いで、各地域で私をアシストしてくれる現地のファシリテータや施設、学校職員との身体ワークを含む事前ミーティングを、今回は対面で実施する時以上に丁寧に実施しました。それは、私が現場に入れない、参加者と直接触れ合えない、またワーク中の雰囲気や流れが全て確認出来るわけではない等、そんなオンラインだから発生するいくつかの“ない”を克服していくためには双方がワークに対してのイメージを事前に共有しなければならぬと感じたからです。いわゆる通常であり、またワークを指導する側である我々の間にも何かが出来ないという障害を抱えた今回のワークは、私が一方的にファシリテートするといった関係ではなく、それぞれがそれぞれを補い合う中で行われました。そんなお互いを尊重し合いながら進められたワークでは、現地のファシリテータだけでなくダンスになれていない職員も皆それぞれがその場に参加する人たちの想い、眼差しを想像してワークに取り組んでいるように感じました。彼ら一人一人の参加者への関わりから、それこそ彼らの眼差しは普段以上の丁寧さを持って利用者に向っていたのではないかと感じましたし、また時間の経過と共にその眼差しは自己の身体にも注がれていっているようにも感じられました。そんな柔らかに複数に広がっていった眼差しはそれぞれの身体と心をほぐし、ケアする/されるといった関係性をいつの間にかブレいしあうものへと変化させ、特に何かするでもなくお互いの手を触れ合うだけの状態や、会場を自由に動き回る学生にただ寄り添い歩くといい行為を、まるでダンスするかのように楽しみ合う姿へと変身させていきました。この眼差しがどの地平まで広がり、ここからどんな身振り、ダンス、関係が生まれてくるのでしょうか？今回、山形の3地域で開催された「からだをまなざす」からは、まなざす身体から創造される様々な可能性を感じさせてくれるものとなりました。



砂連尾 理さん
プロフィール

1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に、ドイツの舞台劇団「Thikwa+Junkan Project」、舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」等。2009年度文化庁在外研修員としてベルリンに滞在。著書に『老人ホームで生まれたとつとつダンス』(ダンスのような、介護のような) (晶文社)。立教大学映像身体学科専任教授。



Tsuruoka

鶴岡



[鶴岡] [ダンス]

開催日：2021年9月22日(水)
(参加者13名)
会場・パートナー：もみじが丘
ファシリテータ：
砂連尾 理さん (振付家・ダンサー)
現地ファシリテータ：
菊地 将見さん (Kickin' Dance Fam)



ら・ら・らレポート



まず午前、周りの人の動きを見て真似てみたり、二人で手を重ねて動いてみました。午後は、午前のそれぞれの動きを参考にからだの相性を見て改めてペアを組みなおし、音楽を聞きながらからだを動かしました。お互いのことをまなざして呼吸や間合いを感じながら手を合わせたり、寄り添いながら動くなど、支援されるだけではなく新しい関係性を感じる時間となりました。普段の行事では積極的に動かない方が、ファシリテータと一緒にみんなの前でダンスを発表するなど、いつもとは違った姿もありました。

実践者の声

- ・身体を自由に動かすことが楽しかった。五十嵐 絵里さん (もみじが丘メンバー)
- ・男の人と触れ合って踊るのは恥ずかしかったけど、踊りは好きなので楽しかった。齋藤 真澄さん (もみじが丘メンバー)
- ・先生！(砂連尾さんと)テレビ！(テレビモニター越しに会話をすることが)楽しかった～！佐藤 一成さん (もみじが丘メンバー)

「正解が間違いかは置いておいて、「共に在る」ことをたのしむことは、とても豊かなこと。それは、優秀でもなく、「支援する・される」という関係でもなく、お互いの存在・在り方(表現)を丸ごと受け入れる皆さんのあたたかな関係性があったからこそ味わえた豊かさだと感じています。福祉という分野だけでなく、人間同士の関係性が必ずある、この社会で忘れてはならない、大切なことをからだをつかって表現した時間でした。

現地ファシリテータ/菊地 将見さん
(Kickin' Dance Fam)

今回のワークショップでは、利用者に向けた「まなざし」の大切さを学びました。表情や仕草に意識を向け、相手の呼吸に動きを合わせた型を押し付けないダンスは心を開放してくれることを実感しました。それぞれが自由な動きをしているのに一体感が生まれる感覚に感動しました。誰もが楽しい気持ちで満たされた時間を過ごすことが出来ました。

パートナー団体/五十嵐 みゆきさん
(もみじが丘スタッフ)

まなざしコメント

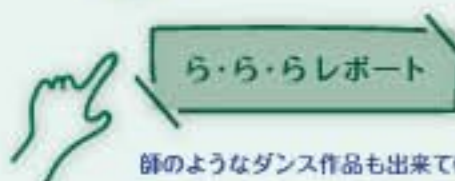
ファシリテータ/砂連尾 理さん
(振付家・ダンサー)

もみじが丘の職員さんが現場で様々な介助やケアをまず一生懸命やられているなかに僕らが入っていくことで、少し普段と違う文脈の関係ができて、「ケアする/される」という関係性からいったん距離を置けることが、ケアの現場にアートが入ってきて起こるいい作用だと思います。打ち合わせの段階から、ワークは利用者さんのためのワークだけではなく、職員の方々も一緒に何か変化を感じていけるような時間になるといいなと言っていました。実際にいい意味でそういう時間になったような感じがありました。私たちの生活や社会では、実は今日のもみじが丘さんのような人たちと一緒に生きていて、普段その豊かな世界を知らない人たちがこの場を見て共有できたときに、その時間が何か生きて、感じ方が広がっていくんだと思います。そういう視点で社会の人たちすべてが生かされたとき、もっと社会が変わり、もみじが丘さんを取り巻く環境も変わって、それが本当のダイバーシティとかインクルーシブな世界になる。そのために、このワークショップのようなことを積み重ねて、協働していけたらなと思っています。



[山形] [ダンス]

開催日：2021年12月2日(木)、3日(金)
 (参加者 20名)
 会場・パートナー：
 デイサポートたんぽぽ工房
 ファシリテータ：
 砂連尾 理さん(振付家・ダンサー)
 現地ファシリテータ：
 加藤 由美さん(ダンススペース主宰)



ら・ら・らレポート

たんぽぽ工房のメンバーとスタッフがペアになり、画面の向こうの砂連尾さんの動きを真似たり、ペアで手と手や目と目を合わせて動いてみました。メンバーの自由な動きにスタッフが振り回されて動いていて、障がいのあるメンバーが振付師のようなダンス作品も出来ていました。少しずつ、スタッフ側の気持ちやからだがかたくていく様子が見られました。画面の向こうの砂連尾さんの面白い動きを一緒に行うことが楽しくて、笑顔がたくさん見られる元気な現場でした。

実践者の声

- ・いろいろな手の動きが楽しかった。今度は歌や楽器もやってみたい。
堀 隼也さん(デイサポートたんぽぽ工房)
- ・またスタッフと一緒に踊りたいです。加藤 仁美さん(デイサポートたんぽぽ工房)
- ・素敵な時間で、面白かったです。鈴木 文子さん(デイサポートたんぽぽ工房)



「皆さん、こんにちは～ジャレオです！」
 「コ、ン、ニ、チ、ハ～!!」
 たんぽぽ工房の皆さんのとても元気の良くて挨拶からスタート！参加の皆さんは初めてのダンスに興味津々、そんなウキウキな雰囲気の中でスタートしたダンスワークショップ。スタッフの皆さんの丁寧で愛情あふれるアテンドと共に、砂連尾さんの「まなざし」からリードされてあれよあれよ、あっという間にラッタッタ～！皆さん、もうノリノリです！皆さんのお姿から、たんぽぽ工房さんの日頃の活動の様子が想像され、これが「まなざし」ということだな～と、そして、アートは何気ない日常生活の中から生み出されるのだな～と、改めて感じた時間でした。たんぽぽ工房の皆さん、また踊りましょう！

現地ファシリテータ/加藤 由美さん
 (ダンススペース主宰)

「緊張」から「解放」へと変わったとき、相手への境界線が曖昧になり心地よく感じました。そして、「わたしとあなたは生かす合う関係」だということも感じることが出来ました。踊ることで、ケアする人、ケアされる人というフレームを外すことをほんの少しですが、体験することが出来たように思います。

パートナー団体/守岡 映さん
 (デイサポートたんぽぽ工房)

まなざしコメント

ファシリテータ/砂連尾 理さん
 (振付家・ダンサー)

やられたなあと思ったのは、みなさんがちょっとずつ関係をシフトさせていたこと、その時にしか生まれない新しい感じをともに作り合っていくようなことをやられているのかなと見ていて思いました。一人の踊り方は全員と一緒にというのではなく、「この人だからこう」というような、非常に個性を大事にする時間と関係性と空間になっていたように思います。ダンスを自分の身体だけで捉えるのではなく、カメラのように、関係のなかで二人の身体がどうダンスするかみたいなことを、最後は「ケアする/される」という関係性を越えて、いかに楽しむかという視点でやられていたんじゃないかなと。本当はダンスって、そんなふうに関係性がちょっと変わって、ほぐれ合うと自然と動き合うものだと思うんです。それは触れるというよりも感じるために、人間は自然と動いちゃう。そういうことが自然発生的にぽつぽつぽつと今回起こっていたと思います。それだけ感受性のある職員の方が多んじゃないかなというふうに思いました。

[米沢] [ダンス]

開催日：2021年12月15日(水)、16日(木)
 (参加者 20名)
 会場・パートナー：
 山形県立米沢養護学校
 ファシリテータ：
 砂連尾 理さん(振付家・ダンサー)
 現地ファシリテータ：
 渡邊 京子さん(山形心体表現の会 La・シブア)

Yonezawa
 米沢



実践者の声

今回のようなものは私自身は初めてでしたが、体験させてもらって、あ、こういうダンスがあるんだなというか、こういう形の取り組みがあるんだなというの、私だけでなく今回参加した教員は皆感じたのかなと思いました。いろんな生徒の普段とはちょっと違うような動きも見られてよかったです。最後のYくんなどは、授業中寝っ転がることを止めるような場面がよくあります。でもそこを彼の表現として見ていくような新たな視点があり、Yくんの動きを皆で真似してみようというのがすごく新鮮というか、面白いなと思いました。

パートナー団体/前山 祥子さん
 (山形県立米沢養護学校教員)

広い体育館にテレビが3台設置され、コーディネーターが画面の中にいる不思議な空間で、画面に集中する少し緊張の中でのスタートだった気がしたのですが、動きが始まってすぐにその緊張感が、身体や動きに心傾ける緊張感に変わっていったのがわかりました。「まわる」から始まったダンス、同じ動きの中にも、その人が持つ個の美しさが見える瞬間がいくつもあつた気がします。触れる事が難しい制限されていた環境でしたが、その制限が逆にひとり一人を引き立てていたようにも感じました。きっと、制限から離れた時には、個の美しさが周りとの関係の中でさらに広がりをみせるそんなチームだと確信した2日間でした。

現地ファシリテータ/渡邊 京子さん
 (山形心体表現の会 La・シブア)



中学部1年生、2年生、3年生が参加してくれました。砂連尾さんの動きを真似てみることから始め、現地ファシリテータがみなさんの動きを感じて相互に影響し合う関わり方を探ります。徐々に参加者も自主性を持って動いてみるようになったり、先生が主役になってみんなで真似てみたり、生徒が主役になって真似をしてみました。最後には、体育館を全部使って走り回り、寝っ転がる方がたの真似をみんなで行うなど、参加者全員がより自由になり、からだの枠が大きく広がった瞬間がありました。

ら・ら・らレポート

型にはめてしまうような、こうでなければならぬと生徒たちを導いていってしまうんだと、ある意味自分たちの自戒も込めて感じました。そうじゃなくて良いんだ、自分の好きなように表現して良いんだ、その型から外れたところで、自分で表現したり動いたり、して良いんだという経験を子どもたちができたっていうのは、すごくよかったです。

パートナー団体/井上 正人さん
 (山形県立米沢養護学校 元教員)



まなざしコメント

ファシリテータ/砂連尾 理さん
 (振付家・ダンサー)

教育の現場とか福祉や医療の現場というのは、型みたいなものがないと成り立たない部分がありますし、全部を自由にすると收拾がつかないことがいっぱいあって、長い時間をかけて出来上がってきたものだと思うんです。同時にこういうシステムがしっかりしてくれればるほど、システムからこぼれていくことがノイズになったりするような側面があると思います。でもそれを「こうしなければいけない」とするよりも、アートと教育の世界がよい意味で仲良くタッグを組むことが、これからは重要ではと私は感じています。障がい者だけでなく、いろんな国から人が訪れるこれからの日本の社会環境のなかで、日本人だけではなくコミュニティや場所が、ますます増えていくと思うんです。そういう時に、例えばワークショップの最後にやったように環境を逆転させていく柔軟さや、一緒に学び合っていくようなことを経験し合いながら、共に成長していけるというのかなというふうに思っています。そういった意味で、アートは人によって価値基準が異なっていて、それゆえ社会になかなか浸透しない側面もありますけれども、普段とは違う考え方を時に取り入れて、お互いに手を伸ばし合えるようになっていければいいなと思います。

サカタアートマルシェ2021「いろいろないろいろ」

Sakata
酒田

開催概要

会期：2021年9月18日(土)～26日(日)
会場：酒田市 出羽遊心館
主催：酒田市、酒田市教育委員会、酒田市文化芸術推進プロジェクト
共催：やまがたアートサポートセンターら・ら・ら、社会福祉法人酒田市社会福祉協議会
実施報告/来場者数：652名 出展作品数：123点



事前に出展団体、地域のアートディレクターや学芸員、主催者と共に「どんな展覧会にしたいか」を話し合う場をつくり、展示方法を考える作品持ち寄り相談会を実施しました。作者の思いや作品の魅力を伝えることを大切にしながら創意工夫を繰り返し、出展団体のみならずと一緒にご覧いただき、展覧会では、酒田市出身の画家と市民との共同作品「夢傘福」も展示。出羽遊心館の各展示室は、茶室や廊下、床の間といった、背景と融和させたり違いを際立たせることにより、豊かなアート空間となりました。

いろんな人が作品を見てくれて褒めてくれて嬉しかった。今年も作品をつくってほしいです。

出展者/元木 武弘さん(あらた)

折り方を教えてもらい毎日楽しく手作業できた。コツコツと作り続けた物が形になって嬉しい。

出展者/Fさん(あらた)

施設の方々との共同制作作品「夢傘福 そら」を展示することができました。新型コロナウイルス感染症対策の中、直接ワークショップを行うことができず映像によるパーツ制作となりましたが、完成した作品は輝く多くの個性が集まり透き通った空のような美しい作品になったと思います。

ゲスト/佐藤 真生さん(画家)

126点のアート作品、本市出身の作家 佐藤真生氏と障がいのある方々との共同作品の展示会。出羽遊心館の各展示室は、茶室や廊下、床の間など、背景と融和させたり違いを際立たせたりしながら広がりあるアート空間となり、色鮮やかな絵画、鉛筆のみで描かれた緻密なデッサン、迫力のある書や、神秘的な造形物など、多種多様なアートが全館に溢れました。様々な手法で表現された作品は、観る人に命の躍動感を感じさせるとともに、表現活動の大切さを訴えかけていました。

主催者/池田 晶さん
(酒田市教育委員会 社会教育文化課 文化芸術係)

出展団体/伊藤 剛さん
(酒田特別支援学校 学習部長)

実践者の声

本校から18点の作品を出品しました。小学部の縦5m、横6mの大型足跡アートは会場の出羽遊心館に入るとすぐ目に入る真正面の最高の場所に展示していただきました。中学部の生徒が今まで書き溜めた作品の数々は趣のある茶室の中に広げて展示していただくなど、子どもたちの個性豊かな作品が会場であらゆる輝き、映えるようにと、スタッフの皆さんが1点ずつ展示の仕方を考えてくださったことが大変ありがたかったです。

「アートってよくわかんないんだけど、なんか面白いんだよね」そういってもらえるように心がけています。アートには不思議な力があるけど、説明できなくて、でも面白さは伝えていきたい。そのためにはまずは参加して欲しい人たちに面白がってもらうことが重要だと考えています。やってみると本人たちが面白がってくれる人が増えることでなぜかアートはもっと良くなります。するとまた面白がる人たちが増えるんです。酒田市の中で少しずつ面白がってくれる人が増えてきています。これからもっと増やしていきたいと思っています。

アートディレクター/中島 友彦さん
(映像作家、アートディレクター)

来場者の声

- ・出羽遊心館の和の世界に、作品がうまく展示されていて楽しく鑑賞できた。
- ・案内図が美術館の図鑑のようで、読みごたえがあり、より鑑賞を楽しむことができた。
- ・作品の素晴らしさはもちろんだが、展示の素晴らしさで作品がより一層輝いて感じた。

「さあ 咲き誇れ! ひょうげんの花 2021」

Tsuruoka
鶴岡

開催概要

会期：2021年10月1日(金)～10日(日)
会場：鶴岡アートフォーラム
主催：鶴岡市
共催：やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
実施報告/来場者数：967名
出展作品数：143点(鶴岡市)、29点(巡回展)



出展団体を対象に、講師に学芸員を招き、作品を生かす展示の仕方や見せ方を学ぶ実践研修を開催しました。市民から募集した花の作品を会場中央に展示し「だれもが個性の花を咲かせることができる街を目指して」というテーマを伝えるシンボルとしました。「からだをまなざす ダンスワークショップ@鶴岡」の記録動画の上映、県公募展入賞作品、「さざしとまなざし 2021」巡回展も同時に開催。今年度からの取組みとして、オンライン展覧会を開催し、展示作品の紹介やゲストのコメントを交えてYouTubeで配信しました。

来場者の声

- ・やさしい気持ちになった。すばらしい作品に出会えて私も表現したいと思った。
- ・目のつけどころが違います。実直です。嘘がない。だから人に感動を与えます。
- ・すばらしく、自身も障害者であり、作品を出展したこともあり、作品を作成してこうと意欲を新たに、また感動しました。
- ・すごい!! 自分表現に励みます。色使い、技法、感覚が良かったです。ありがとうございます!! 今日はずっと気持ちで家路に向かいます。



実践者の声

僕のイラストのテーマは「ほかの人が思いつかないものを描く」こと。オリジナリティにあふれた、そんなキャラクターをたくさん描いたりするのが大好きです。次回、僕がどんな作品を応募するのかどうか、楽しみに待っていただきたいです。

出展者/本間 航さん(翔はばたき)



さまざまな事情で展覧会場に来られない人のため、また、インターネットを通してより多くの人にこの活動に興味を持っていただけたらと思い、オンライン展覧会に関わらせていただきました。なるべく多くの作品を紹介し、展覧会の内容とどのような作品が展示されているのかを伝えるように努めました。視聴者の方の反応が分からず、うまく伝えられたかが心配です。多くの方に障がいのある方の表現に関心を持っていただけたら幸いです。

ゲスト/平井 鉄真さん
(鶴岡アートフォーラム館長/学芸員)

全体的に作品制作者の皆さんの力強さが感じられる印象がありました。今回で2度目の参加となりますが、展覧会で吸収した「まなざし」の視点をどう事業所へ持ち帰り、どのようにして次へ繋げていくか、が個人的な今後の展望と課題に感じました。来年度もぜひ継続して参加し、他施設の取り組みや挑戦に触れることで、より良い表現のかたちを学び、気づきへ繋げていければと思います。

出展団体/岡崎もといさん
(スローワーク新町)

三回目の開催となりました今年度は、新たな試みとして、ぎやらりーら・ら・らの武田氏、鶴岡アートフォーラム館長の平井氏をゲストにお招きして作品を紹介、解説しながら会場を撮影した動画を作成しYouTubeで公開いたしました。来場の方も含めたくさんの方々に見ていただき、障害のある方もない方も存分に楽しめる展示会となりました。心を動かす作品との出会いの場に携わることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。

主催者/原田 桃次さん・赤羽 主知さん
(鶴岡市役所 福祉課 障害福祉係)